

阿蘇で農業のはずが行革審部会長に 「地方分権」答申に政府は冷淡 日本新党結成、新党ブーム 参院で4議席、小池百合子氏らと国会へ <細川護熙さんのあのこと>

熊本日日新聞 | 2023年8月19日 05:00



記者会見で新党の名称を「日本新党」と発表する細川護熙さん=1992年5月22日午後、東京・赤坂の草月会館

(聞き手・宮下和也)

－前は熊本県知事を辞めて阿蘇で農業をしようということでしたが、世間はなかなか許してくれません。臨時行政改革推進審議会（第3次行革審）の「豊かなくらし部会」の部会長に就任なさったのは知事退任とほぼ同時の1991年2月です。日経連会長の鈴木永二さんが行革審の会長でした。直接依頼があったのですか。

そうです。鈴木さんとのご縁は何だったかという...。普通政治家は、お金をもらうためにすぐ経済界の人たちにゴマをすって近づくわけですよ。経団連に行ったり、経済同友会に行ったり。私はそういう付き合いは全くありませんでした。頭を下げていくことも嫌だし、そんなところに物乞いしに行くのも嫌だし、だから経済界の人たちとのご縁はほとんどありませんでした。

ただ何かの機会に、評論家の秋山ちえ子さんに呼ばれた席で、鈴木会長と同席したんですよ。秋山さんは時々、熊本に来ておられ、熊本県政もラジオ番組でいろいろバックアップしていただきました。秋山さんと仲のいい、福岡の中洲で一番のクラブ「フェニックス」をやっておられた小森田禮子さんという方が熊本の方で、秋山さんが熊本に来られる時はいつも小森田さんが一緒でした。

それで、秋山さんと小森田さんが鈴木さんと会食している時に呼ばれたのかな。東京のイタリアンレストランだったか、和食にも行った覚えがありますが、そこでお会いしたんだと思います。

その後、「ちょっと会いたい」と直接電話がかかってきて、行革審の部会長を引き受けてくれないかと。「外政の方は稲盛（和夫）さん、内政の方は細川さんにやってもらいたい」。それで、お引き受けしましょうと、（阿蘇の）畑の方は頓挫しちゃったわけです。

行革審答申へ休み返上で議論

－第3次行革審の「豊かなくらし部会」は細川護熙部会長、内田健三部会長代理ら27人。消費者・生活者重視、地域重視の観点から行政のあり方を検討しました。また、国際化に向けた日本の対応を考える「世界の中の日本部会」の部会長は稲盛和夫京セラ会長（当時）でした。議論は知事退任直後の1991年2月にスタート。同年12月に、第3次行革審の第2次答申として宮沢喜一首相に提出されました。

答申までは、それはもう大変でした。毎週土曜日曜もなしに、休みの日も返上して議論していましたからね。これがまたそうそうたるメンバーなんです。ヤマト運輸の小倉昌男会長をはじめ、その時を代表する経済界の重鎮、学者が入っていました。そういう中で若造の私が部長というの、ちょっと荷が重かったけれども、それだけ役所も緊張感を持っていたし、よくサポートしてくれました。

答申は紙としてはまあまあのものでしたと思います。かなり「へこませ」ましたけど。ところが提出後の政府の方の反応は極めて冷淡なもので、特に地方分権などはほとんど及第点はなかった。この1年何をやってきたのかという思いがありました。

－特に力を入れたのは地方分権。

はい。規制緩和もそうでしたね。それこそ例の、県立劇場の話もありました。

－熊本県立劇場前のバス停の話を書きから引きます。劇場玄関の真正面にあって景観の妨げになるバス停を10メートルほどずらそうとした時の話。

〈スピードと実行は私の政治のモットーです。思い立ったらすぐに実行。私に任せてもらえるなら、一人でバス停をかかえて、ものの三十秒くらい、即席ラーメンがゆであがるまでには片がつくはずだと思っていました。ところが、これがそうは簡単に事が運ばなかったのです。

「簡単には動かさません。バス停は、運輸省の管轄でございます」

こんな些細なことにまで霞が関のハンコがいるのです（細川護熙、岩國哲人著『鄙の論理』から）

自民党一党支配を壊せ 一人で「新党結党宣言」

－国と地方を対等、水平の関係と位置付ける地方分権一括法が成立したのはずっと後の1999年7月。行革審のこの答申は、その出発点の一つといえるものですね。国や都道府県の権限をモデル市町村に移管する「地方分権特例制度」（パイロット自治体）など、今につながる提案が少なくありませんでした。

当時、地方は本当に中央の出先機関でしかなかったですね。一括法はその時の答申の流れが生きたものです。基本的にはまだ不十分でしたが、大きな軌道だけは引いたと思います。あれがなければもっとひどいことになっていたんじゃないですかね。

－行革審の仕事をなさるかたわら、細川さんは知事時代の経験や地方行政に関わる本を次々に出版、メディアの注目を集めていました。とはいえ、答申提出から半年後の92年5月、月刊文芸春秋に「自由社会連合結党宣言」が掲載される直前の記者会見は突然でした。

答申を出した時からすぐ政府の受け止めは分かりましたので、これは腹をくくって一戦やらなきゃならぬ、結局行き着くところは新党しかないなというところまで考えていたわけですね。2～3月頃だと思います。（結党宣言は）軽井沢の家にもって何日かを書きました。文芸春秋は5月の連休後に出たんですかね。だから4月の連休の終わり頃から軽井沢に行って、そこで最後の締め切り前のやりとりを文芸春秋とやったと思います。



大勢の報道陣を前に新党結党を正式発表する細川護熙さん＝1992年5月7日午後、東京・内幸町の日本プレスセンター

－自由社会連合結党宣言の基本目標を見てみます。▽立法府主導体制の確立（官僚政治の打破、行きすぎた行政府主導の是正）▽生活者主権の確立と選択の自由の拡大（生活者重視、規制緩和）▽地方分権の徹底▽異質・多様な文化の創造▽世界平和へのイニシアティブ。今見てても全く古びていないし、日本社会の課題が押さえられています。一人で書きになったとのことですが、アドバイザーは？

（元朝日新聞記者の）安藤博さんは、鹿児島支局の1年先輩です。だからアンバクさんにはよく話を聞きました。学習院大学の香山健一さんにも、何回か話を伺いました。内田健三さん（元共同通信論説委員長、法政大教授）からは政局についてはいろいろ話を伺いましたが、政策についてはあまりお話ししたことはないです。

そのほか行革審と一緒にやっていた、土光敏夫さんの秘書だった並河信乃さん（行革国民会議事務局長）。あとは官僚の人なんかで、行革審で知り合った人たちが何人かいました。これをどう考えるとか、この件をどう考えたらいいのかなど、そりゃもう学者といわず記者、官僚の人たちからも、その都度お話を聞いていましたから。

－新党結成は、自民党に対抗できる政権の受け皿をつくるという認識だった。

そうですね。38年間続いた自民党の一党支配体制をこわして、それをつくるのがとにかく、政治の活性化、流動化のためには必要だろうということですね。

－既成政党の枠組みでは難しかったのですか。当時は社会党が野党第1党でしたが。

（事実上の）自社連立みたいな、いわゆる55年体制というかたちでしたからね。（社会党は）イデオロギーもはっきりしている。一部の労働組合とくっついて、かなり偏ったイデオロギーで物事を判断するところがあったものだから。

– 細川さんはよく「中庸」という言葉を口にされるそうですが、社会党はやはり「中庸」には…。

ならないですね。いつの時代でも中庸というのが、一番大事だといまでも思っています。自民党の中だけじゃなく、ほかからも引っ張ってきて、自民党の中からもいい人たちを引っ張ってきて、良質な、まともな政党をつくるってことでしょうね。

結党宣言のところで言うなら、政（まつりごと）はよろしく簡なるべしというのが昔からの私の持論です。簡略で分かりやすくないとだめなんだということ。だから自由社会連合の基本目標も、できるだけ簡なるべしで書いている。それからもう一つ、これも論語の中にあるんですけど、孔子が政治の要諦は何かと弟子に聞かれて、子路だったかな、それは名を正すことだと答えた。

子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先。子曰、必也正名乎（子路いわく、衛君子を待ちて政をなさば、子まさになにをか先にせむ。子いわく、必ずや名を正さむか）

つまり何をかいてもスローガンを分かりやすく言わなきゃだめだと。方向を分かりやすく示さないとみんなついていけない。例えば「新しい資本主義」とか、「異次元の○○」とかね、何を言ってるのか分からない。ちっとも名を正していないわけなんですね。野党が言ってることもだめ。私から見るとみんなそうです。しかも簡でもないんですよ。複雑で。

法律ももっと少なくあるべきだと私は思ってるんです。いま1年に150本ぐらいかな、法律を出してますね。一つ新しいものをつくるなら、一つ古くなったものをやめてというなら話はわかりますけど、こんなに次から次と法律をつくって、本当に民のためになっているのかということですよ。ちっとも簡ではない。そういうことも含めて改めなきゃならんと思ったんです。

「日本新党」の党名はコピーライターらと議論

– たった一人で結党記者会見に臨んだ時、「私がソロで第一バイオリンを弾き始め、やがて大きなオーケストラに」と述べて、国民の共感を呼ぶところとなりました。

（この発言も）別に誰のアドバイスも聞かなかったと思います。それから名前を考えたんでした。その時は仲畑貴志さん（コピーライター）とか、三木清さん（メディアコーディネーター）、秋山道男さん（編集者・プロデューサー）らが中心だったと思います。それで東京プリンスホテルの一室に、私ももちろん一緒に集まって、半徹夜みたいな感じで。

私が感心したのは、コピーライターみたいな人たちは感性だけで適当にコピーを作ってるんだらう、思い付きだろうと思っていたら、なかなか科学的にやってるんでびっくりしました。ホテルの部屋の三方の壁に、これは「生きてる言葉」か、「死んでる言葉」か、って紙に書いて貼っていくんですよ。「民主」死んでる。「連合」もだめとか、みんな思い付いて言うんだけど、死んでる言葉ばかり。なかなか生きてる言葉は出てこない。そうやって半徹夜で、結局残ったのが「日本新党」だった。初めは少し時代的にどうか、と思ったりもしたんだけど、「いやあかえって新しいかと思えますよ」と言ってね。結局そうなった。みなさんいい感覚してましたよ。

– それからたちまち新党ブームが発生して、細川さんは渦中の人になります。まずその年7月の参議院選挙に、日本新党は比例代表で候補者を立てました。細川さんを含めて4議席を獲得されましたが、大変な選挙運動だったのでは。当時の世間の受け止めはどうでしたか。

5月の旗揚げから7月の選挙で、しかも比例区ですからね。それから候補者を探すのがまず大変だったんですよ。それも、テレビに出てお笑いをやっているような人じゃなくて、もっとまともな勝負をしようと思ってるもんですから、例えば武田邦太郎さんは80歳近くだったかな。それほど世に知られた人ではないが、農業の専門家です。それから小池（百合子）さんですね、寺沢芳男さん（元野村証券副社長）というような人が当選しました。私は出ないでおこうと思っていたんですが、自分が言い出しついで出ないでどうするんだと言われて、しょうがなく出ました。

– 円より子さん（後に繰り上げ当選）、安田公寛さん（後に天草市長）もその時の名簿にありました。

安田さんや円さんたちが当選してもらったらほんとに良かったんだけど。そういった顔触れで、4議席しかとれなかったけれども、しかし竹下（登）さんなどの自民党の老かいな人たちは「日本新党なんて1議席もとれないだろう」と言ってたんですから。そういうことはよく耳に入っていました。だけど勢いから見ていると、まあそんなもんじゃないだろうとは思っていました。

– 次回はたいへんな人気だった選挙戦の様子、そして細川政権が誕生することになる衆院選の話から。

細川護熙 私のプリンシプル インタビュー〈あのごころ〉



前の記事

永田良三さんの秘書団入りから「権不十年」まで 中央の人材の知恵借りた県政運営 知事3選不出馬から第3次行革審部会長…そして日本新党へ <細川護熙さんのあのごころ>

2023年7月22日